勝鬘経義疏如来蔵章に引用せられた本義説について

渡部孝順

勝鬘経の無辺聖諦章以下の四章は、二乗所得の四聖諦と、一乗所得の四聖諦と、八聖諦の甚深不可思議なる所以を説き、この二種の四聖諦を、如来蔵章（一二四頁）では『説二作聖諦義一説二無作聖諦義一説二作聖諦義一者是説二有量四聖諦義一……（一二五頁）説二無作聖諦義一者説二無量四聖諦義一』と、有作有量、無作無量の八聖諦を挙げ、境なる聖諦に、有作無作がある以上、その人に従つて（一二四頁）『是故世尊、有二有為生死一無為生死一』とし、亦、その所証に従つて『涅槃亦如レ是有余及無余』と、有余涅槃と無余涅槃のある事を説いている。

右のように、有作無作の八聖諦、有量無量の八聖諦の問題、それによる有為生死と無為生死、それによつて証せられた、有余涅槃、無余涅槃の問題を、注釈の上で如何に整理し、如何に纏めあげるか、古来から論争の的となつたようである。

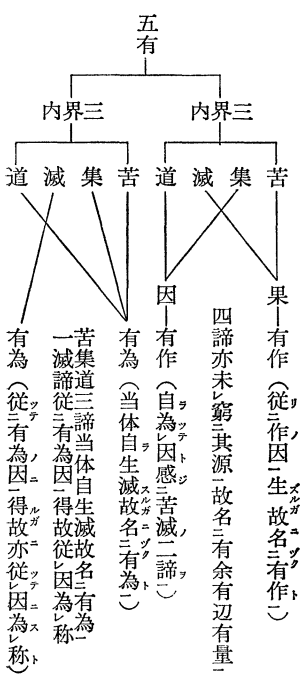
勝鬘経義疏如来蔵章（一二六頁）によれば「夫今此二種聖諦合有二十名一三界内諦有作、有量、有辺、有為、有余、三界外諦無作、無量、無辺、無為、無余」と前置きし、この八聖諦の十名について、縷々、説明を加えている。右の義疏釈を簡単に図示すれば左の通りになろう。

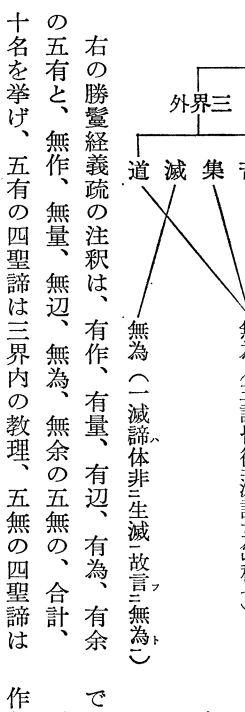
(一)　従レ人為レ称也

五有——二乗七地以下（皆因二未レ竟一三界外事一更有レ応レ作為レ称也）

五無——八地以上（皆因二修習已極一更無二新造為レ称）

(二)　当体称





右の勝鬘経義疏の注釈は、有作、有量、有辺、有為、有余の五有と、無作、無量、無辺、無為、無余の五無の、合計、十名を挙げ、五有の四聖諦は三界内の教理、五無の四聖諦は三界外の教理である事を基盤とし、その中の有作、無作と有為、無為を代表せしめての注釈である。

有作、無作と。有為、無為とは同意義に使用される事もあるが、此処では、有作無作を「未レ窮二其源一」とか、「雖レ有二作義一但作用徴不レ如二界内之現一故受二無作名一」等、仏果に至る迄の修行過程、修行者のはたらきを主としたものであり、有為、無為は「当体生滅」とか「体非二生滅一」と、記されているように、当体、そのものを指しての解釈と見做してよいと思う。

これと共に、注意すべきことは、有作、無作の場合は、集諦、道諦の二諦を因とし、苦諦、滅諦の二諦を果と見做しながらも。有為、無為の場合は、苦、集、道の三諦と、滅の一諦とに分別している事である。

その理由として考いられるのは、有作無作の場合は、作用、即ち、つくり出すはたらきを主とした言葉に使用されているために、因と果とに分別し得る訳ではあるが、有為無為の場合には、当体、そのものを表面としての解釈であつた為め、滅諦そのものを独立させ、それを主眼とせざるを得ないものがあつての事で、止むを得ない教理の立て方であつたと思われる。

更に、考いをすすめるならば、この義疏の云うように、有作無作を以て分別された、四聖諦のうちの、苦滅の二諦は結果であるから、この苦滅の二諦に、作用、即ち、修行者のはたらき、そのものを認める訳には行かない筈である。謂うなれば、結果である苦滅の二諦をば、作用のはたらきを中心とした。有作、無作の教理を以て分別する事は、当然、無理な解釈だと云わざるを得ない。

そこで、この義疏の採用しておつた、五有、五無の分別、教理に対して、別な注釈が現れるというのも、むしろ、当然な事であつた。

如来蔵章（一二七頁）に「本義云苦滅二諦当体不レ能レ作レ果故名二無作一」と、引用されている本義説がそれである。この

本義説によれば、苦滅の二諦は、集道の二諦を因とした結果であるから、作用の義を持つている筈がないから、苦滅の二諦は、無作というべきである。作用の無いという文字通りの、無作というのが筋が通っているというものであろうというのが、この本義説の注釈である。

この本義説に対し、勝鬘経義疏は、次のように批判している。「然則三界内苦滅二諦亦応二無作一故不レ須也」と、即ち、苦滅の二諦を無作というならば、三界外の苦滅の二諦は、ともかくとしても、三界内の苦滅の二諦も、無作という事になつて、この義疏の主張する、五有を三界内、五無を三界外と主張して来た事に相違するので、この本義説を採用する事は出来ないというのである。

この義疏のいう、五有を三界内、五無を三界外と説く教理と、本義説のいうところと、いずれが、勝鬘経の真意を伝いるかという事も、大きな問題ではあるが、ここでは、この本義説は、一体、何人の教説であろうか、それを捜し求めるのが目的である。

却説、この義疏は、三界内の苦滅の二諦は有作、三界外の苦滅の二諦は無作と説くのであるが、本義説は、苦滅の二諦を三界内なる有作、三界外なる無作と分別することに拘束されない教家であつたろうと想われる。こうした、考い方を持つた教家として、光宅寺法雲を挙げる事が出来る。

例いば、光宅の法華義記（p. 599 下）方便品に見えるものであるが、経文に『仏説二一解説義一我等亦得二此法一到二於涅槃一而今不レ知二是義所レ趣』という一文があり、この一文は、勿論、法華已前の三乗は方便にして、今の、この法華は真実の法なる一乗を説く前提となる、所謂、動執生疑の一段であり、この『一解脱』の一句には、三乗人の解脱と一乗人の解脱の二義が秘められている。

これを、光宅は義記に「今、先解二三乗人両種果一、一者有為果、二者無為果、有為果即是尽智無生智照二三界因一……二者無為果三乗人三乗因尽、是有余涅槃、三界果尽、是無余涅槃」と、記してある。これを、簡単に、図に示して見れば、

一、有為果―三乗人照二三界因一

二、無為果＜三乗人三界因尽――有余涅槃。
　　三界果尽――無余涅槃。

と、なるようである。

右の光宅説は、勝鬘経義疏の採用しておいた、有為有余等の五有は三界内、無為無余等の五無は三界外という教理は見られない。それに、有為無為と、有余無余等の使い方の次元が相違している。勝鬘経義疏のように、有為果は有余涅槃、無為果は無余涅槃というのではない。無為果のうちに、有余涅槃と無余涅槃とが分別されているのである。

謂うなれば、この義疏が主張しているように、有作、有量、

有辺、有為、有余等を、一律に、五有して三果内。無作、無量、無辺、無為、無余等を、一律に、五無にして三界外と分別しておらないということである。

本義説の「苦滅ノ二諦当体不レ能レ作レ果故名二無作一」の教説を、この疏は「然則三界内苦滅二諦亦応二無作一故不レ須也」と批判しているように、本義説は、有作は三界内、無作は三界外と分別することに関わらないものであつた。それに、本義説のそれは、苦滅の二諦なるものは、結果そのものであるから、果を招くなどという事のあろう筈もないので、無作と名づくべきものであり、苦滅の二諦の結果を招く作用を持つているのは、集道の二諦に外ならない。集道の二諦は有作と称すべきものである。というのが、本義説の云わんとする所である。この本義説は、光宅の法華義記の説に近いものがあるという事が出来る。

光宅の義記には、次ぎに「『解脱』是有余無余即是滅諦也『義』者即是道諦、挙レ果明レ因……」なる注釈が見えている。即ち、光宅によれば、滅諦とは三界の因を尽した有余涅槃と、三界の果を尽した無余涅槃をいうのであり、而も、有余無余の二種無為果を「但、二種無為只是一時、因尽即是果尽時、果尽時為因尽時」と注釈しているように、因の尽くる時は果の尽くる時、果の尽くる時は因の尽くる時であるというように、有余涅槃と云い、無余涅槃と云い、有余、無余の言葉は相違しても、同時であるというのが、光宅の教いるところである。即ち、光宅は『解脱』の果を先きに挙げ、次ぎに『道』の因を明して、因果同時を説くのが、法華経であり、仏の教いであると主張している訳である。

この疏が、有余、有為等を三界内、無余、無為等を三界外に分別しておつたのに相違して、光宅の義記に見えておつたように、有余、無余等の言葉は、独自のものを持つておつた。この疏の引用しておつた本義説の「無作」なる一句も、三界内の有、三界外の無作というような考い方とは相違しており、むしろ、光宅の法華義記のそれに近いものがあるということが出来るようである。

最後に、この義疏の歎仏章の三徳を歎ずる中の、解脱を歎ずる箇所に見える「法雲法師云」云々の一文にも、大きな繋がりがあるのではなかろうかと、想いを走らしているのであるが、この次ぎの課題としておきたい。

以上